

「男、突っ走る！」

第
109
回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内好乃	木内彦蔵	木内雅也	『オフィスツリーイン』代表
(77)	(83)	(24)	
雅也の祖母	雅也の祖父		

1 水上を走るフェリー

座っている彦蔵。

外に出て、景観を眺めている雅也。

N 「尾道駅近くから出ているフェリーに乗って約五分すると、しまなみ海道のスタート地点である『向島』に到着。ここが、父が育った街でもありました」

2 広島木内家・外観

古い平屋造りの借家で、集合住宅の中の一軒にある。

3 同・玄関

彦蔵が引き戸を開けて帰ってくる――
スーツケースを引いた雅也も共に入ってくる。

彦蔵 「帰ったぞ」

雅也 「おばあちゃんッ」

と、台所のドアが開き、彦蔵の妻・好乃（77）が嬉しそうに出てくる。

好乃「雅、よう来たよう来た」

4 同・A 和室

二つの和室を襖で挟んでいる。

テレビをつけたまま、イヤホンをした

彦蔵がうたた寝をしている。

5 同・台所

テーブルで、コーヒーを飲んでいる雅

也と好乃。

好乃「こっちまで遠かったじゃろ」

雅也「まあ、新幹線で二時間半ぐらいかかる

からね。でも、たまには一人旅も良いと思

ってさ」

好乃「正月に電話するぐらいじゃったけえな。

それにしても、あんたよう孝志に声似てき

たわ」

雅也「父さんに？」

好乃「ほうよ。さつき、玄関で声かけたじゃ

ろ。孝志にそっくりで、びっくりしたんじ

やわ」

雅也「そんなに似てるかな。でもね、健のほう
うが声太いんだよ」

好乃「去年じゃったかな。そっちの家に電話
したとき、全然知らん男の人の声が聞こえ
て、慌てて電話切ったことがあったわ」

雅也「あれが、健の声なんだよ。不思議とね、
あいつ電話に出るときだけ、声が太くなる
の。まあ普段の声のトーンも、健のほうが
低いけどさ」

好乃「健はいくつになったんじゃ？」

雅也「二十歳。一月に成人式迎えたの」

好乃「ほうじゃったか。健も、もう二十歳に
なったか」

雅也「声と言えばさ、何年前に、おじい
ちゃんから電話がかかってきたことがあ
つて、普通に電話で喋るじゃん。でもさ、
何か途中から会話がかみ合わなくなって、
もう一回確認したら、おじいちゃん、うち
を父さんと間違えて喋ってたんだって」

好乃「（笑いながら）やっぱり、あんたと孝志は声が似てるんじゃないな」

雅也「気にしたことなかったわ」

好乃「でもまあ、本当によう来てくれたわ。

おじいさんも、今朝市場で魚買ってきて、

今日はさばくって張り切っとるんじゃない」

雅也「お酒飲もうかな。あ、隣にコンビニあったから後で買ってこよう」

好乃「そんなことせんでも、おじいさんの飲んだらええわ」

雅也「おじいちゃん、今でもお酒飲むの？」

好乃「おじいさんやおばあさんの誕生日ぐらいしか普段は飲まんって言うてるけど、本当はカッブ酒こっそり一人で飲んどるんじゃないわ。私に隠れて」

雅也「そうなの？ てか、おばあちゃん、そんなこと分かるの？」

好乃「臭いで分かるわ。それに、うっすら顔も赤うなって。煙草は辞めたけど、酒は辞められんのじゃろ」

雅也「もう、煙草吸わなくなったの？ 昔はよく吸ってたのに」

好乃「煙草が高くなったのも原因の一つじゃろ。年金暮らしで、細々としとるのに煙草買ったたら、それだけで一ヶ月いくらの消費になるか。それ考えたら、まあ辞めてもらって良かったんじゃないけどね」

雅也「ふーん。おばあちゃんも、お酒飲むの？ 昔、親戚で集まった時はよく缶ビール飲んでたじゃん」

好乃「お酒はね、ノンアルコールビールにしたんよ。体のこともあるから」

雅也「そっか」

好乃「あんたは、よう酒飲むんか？」

雅也「うん。実はさ、地元の集まりとかで、結構飲み会するでしょ。そしたら、一年で十キロも太っちゃってね。こりや痩せなきやなって思ってるの。でもさ、ビール少し余らせて、そこに日本酒を混ぜて飲むやり方は、たまにうちの父さんもやってるし、

俺もやってるの。三世代で、そんなこと継いじやった」

好乃「あの飲み方、孝志も真似しよるんか？」

雅也「たまにしか飲まないけどね。父さんも五十超えて、最近健康診断の結果も気にするようになったりして」

好乃「体壊したらどうしようもあれへんじやろ。昔から体にだけは気を付けるように言うとるんじやけど、あの頑固な性格はおじいさん譲りで、私の言うことなんてちつとも聞いとらんのじやわ」

雅也「なるほどねえ」

と、和室から物音が聞こえる。

好乃「おじいさん、起きたんかな？」

と、ドアが開き、彦蔵が入ってくる。

好乃「お起きになりましたか、大将」

彦蔵「おお。今日は、雅が来る言うけん、朝市場行って、刺身にしよう思うて魚買うたんじや」

雅也「さっき、おばあちゃんから聞いた」

彦蔵 「（耳を立てて）え？」

雅也 「（少し大きい声で）さっき、おばあちゃんから聞いた」

彦蔵 「おお、そうか」

好乃 「おじいさん、また耳が遠くなつとるんじゃ」

雅也 「そうなんだ」

好乃 「夕飯の支度の邪魔になるといかんけえ、おばあちゃんの部屋行こう」

雅也 「うん」

6 同・外観（夜）

7 同・台所

雅也、彦蔵、好乃が食事をしている。

雅也 「あれ、今日は誕生日じゃないけど、お酒飲むんだ？」

好乃 「雅が来たけえ、特別じゃ」

雅也 「そっか」

彦蔵 「孝志や真保さんやケンジは元気にしと

るんか」

雅也「うん。みんな元気か」

彦蔵「ほうか。ええ人に嫁に来てもらうたんじゃ。孝志も、真保さんを大事にせなバチが当たるわ」

好乃「また何か言いおるわ」

雅也「今って、ほとんどおじいちゃんが台所立ってるの？」

好乃「そうやね。私、二年前に免許返納したけえ、原付も乗れんじやろ。だから、病院とかどこか行くときは、知り合いのタクシ―にお願いしとるんじやけど、スーパーへの買い物はいつもおじいさんが自転車で行つとるんじや」

雅也「へえ。でも気を付けてよ。自転車の事故だつてあるんだから」

彦蔵「……」

好乃「（少し大きい声で）雅が、自転車の事故には気を付けるようになって」

彦蔵「ああ」

雅也「昔はさ、『男子厨房入るべからず』なんて言葉があつし、おじいちゃんやおばあちゃんたちなんて、それこそ専業主婦が多い時代だったじゃん。でも、おじいちゃんって昔から台所立ってるよね。昔、遊びに来たときはさ、おじいちゃんとおばあちゃんが夫婦で台所立ってたじゃん」

好乃「一人暮らしが長かったり、造船場に勤務してるときも、大阪とか三重とか、いろんなところに応援に行くことがあって、そういうのがあったから、台所に立つことに抵抗はないんじゃない」

雅也「さすがに、もう応援に呼ばれることはないでしょ」

好乃「でも数年前までは、たまに造船場行つたこともあったんじゃない。腕だけはええみたいだから」

雅也「ふーん」

好乃「台所仕事は全部おじいさんがやって、食器洗いとか洗濯とかの水仕事は私がやつ

とるんじゃ」

雅也「台所に立つのも、三世代の遺伝なんだ
ろうな」

好乃「雅も、何かするんか？」

雅也「家で仕事してるから、必然的に昼ご飯
も作らなきゃいけないでしょ。だから、い
ろいろと作るようになって。ちよつとした
お菓子も作ったりするの」

好乃「ほお、あんたはようやるね。昔から器
用な子じゃったから」

雅也「器用かどうかは分かんないけどね。パ
スタも作るようになったんだけど、それは
全部父さんに教えてもらった」

好乃「孝志も、一人でいろいろ作るんやろ。」

あの子がやりそうなことやわ」

雅也「うん」

彦蔵、食事を終えると、棚から目薬を
出して、挿し始める。

雅也「（好乃に）おじいちゃん、目悪いの？」

好乃「白内障の目薬じゃ。私は緑内障で、眼

医者に通院しとるんじや」

雅也「いろいろあるんだね」

好乃「それでも、大きな病気っていう病気はないのがええんじやけどな」

雅也「そうだよ。こっちのおじいちゃんもおばあちゃんも元気だし、岐阜のみんな元気だし」

好乃「高倉のおじいさんもおばあさんも、元気にしよるんか？」

雅也「豆腐屋は、もう何年前も前に閉めたみたい。まあ、中卒からずっとやってきて、もう潮時だって思ったんじやないかな。けどね、向こうも特に大きな病気もすることなく、元気にやってる」

好乃「元気なのが一番じや」

彦蔵、黙って和室へ戻っていく。

好乃「相変わらず、不愛想じやわ。口数が少ないけえ、何考えとるか分からんのじや」

雅也「けど昔から、おじいちゃんとおばあちゃんの話の話を聞いてると、何だか夫婦漫才

みたいで楽しかったけどね」

好乃「普段はブスツと黙っとるのに、何かあるとガミガミ言うじゃろ。よう分からんんじゃない」

雅也、苦笑して和室の方を振り向く。

8 同・B 和室（夜）

布団を敷いている雅也——風呂上がり
の好乃が入ってくる。

雅也「そういえばおばあちゃん」

好乃「どうしたん？」

雅也「免許返納したってことは、もう畑にも
行っていないの？」

好乃「そうなんよ。でも、ホームセンターで
プランター買って、家の前でミニトマトと
か、ちよつとした野菜はこさえとるんじゃ。
後は、干し柿吊るしたり」

雅也「そっか」

好乃「手先が器用なんじゃけ、あんたもやっ
てみたら良いわ」

雅也「できるかな」

好乃「そんな難しいことやあれへんで」

雅也「(スマホの時計を見て)あれ、まだ九時か。あ、そっか。夕飯が六時だったから、それぐらいになるか」

好乃「いつも、夕飯は遅いんか？」

雅也「大体七時半とか、遅いときは八時半とかね。そこから、またいろいろやってたら、夜中の二時とかに寝ることも普通で」

好乃「体壊さんようにしなあかで」

雅也「分かってる」

好乃、枕元にある錠剤とペットボトルの水を口にする。

雅也「眠剤？」

好乃「そうなんよ。通院しとるクリニックでもらってくるんじや。これがないと、熟睡もできんくて」

雅也「そんなに？」

好乃「今は、一錠じゃ効きが強くなるけえ、半分にして飲んどるんじやけど」

雅也「へえ」

好乃「さて、もう寝るかね」

雅也「うん」

好乃「（隣の和室を見て）おじいさん、まだ起きとるわ。どうせテレビつけっぱで、寝よるんじやろうけど」

雅也「そこも、父さんが似たんだね」

好乃「変なとこばっか、親子で似よるんじやわ」

雅也「やっぱり、親子なんだろうね」
と、紐を引っ張って電気を消す。

9 同・全景（翌朝）

10 同・台所

好乃が卵の殻を潰している――寝起きの雅也が入ってくる。

雅也「おはよう」

好乃「よう眠ったね」

雅也「昨日、夜中に何度も起きちゃってさ」

好乃「そうなんか？」

雅也「よく寝たなあと思つて、目開けて、枕元の携帯見たら、まだ十二時とかでさ。それで、もう一回寝て、また目が覚めて、時間見たらまだ夜中の二時で、その後も三時間おきぐらいに起きちゃつてさ」

好乃「私たちの生活に合わせるのは、ちょっと大変かもしれんな」

雅也「おばあちゃん、何やってるの？」

好乃「これか？ 卵の殻を細かくして、肥料に使うんや」

雅也「へえ」

好乃「朝ごはん食べる？ パンで良い」

雅也「うん」

好乃「じゃあ、支度するわ」

雅也「じゃあ、卵の殻やるわ」

好乃「はいはい、ありがとう」

雅也、座ると卵の殻を細かく崩し始める――好乃、パンをトースターで焼き、冷蔵庫からタッパーに入ったスライス

玉ねぎを取り出すと、皿に盛り付ける。

雅也「あれ、おじいちゃんは？」

好乃「買い物行った」

雅也「ふーん」

好乃「（パンと玉ねぎの入った皿を運び）はい、できたよ」

雅也「ありがと。いただきます（と食べ始める）」

好乃「玉ねぎは、ドレッシングかけて食べるんやで」

雅也「分かった。おばあちゃんも、いつも食べてるの？」

好乃「玉ねぎは、血液サラサラになるけえ」

雅也「三食ちゃんと食べなきゃと思っても、どうしても疎かになっちゃうんだよね」

好乃「健康の秘訣は、三食ちゃんと食べることや」

雅也「なるほどね。あ、コーヒー飲もう（と支度をする）」

好乃「昨日もそうやったけど、雅やブラック

「飲めるんやね」

雅也「まあね。でもね、あまり飲みすぎないようにしてるの」

好乃「どうして？」

雅也「ほら、コーヒーって利尿作用があるでしょ。だから、普通にコップ一杯のコーヒー飲んだら、三十分もしないうちにすぐトイレ行きたくなっちゃうの」

好乃「へえ。おばあちゃんは、そういうのないな」

雅也「羨ましいいな。トイレが近くなると何かいやらしいから、打ち合わせの時はコーヒーをちよつとしか飲まないか、あるいは他の飲み物にしてるの。まあ、これから仕事もどうなるのか分からないけどさ」

好乃「コロナの影響、あんたもあるんか？」
雅也「打ち合わせとか、イベントとかがほとんど中止になったり、延期になったりしてる。演劇のレッスン受けてるんだけど、それは今のところ、通常通り開催してる。今

日土曜日でしょ、今頃みんなレッスンや
てるんだろうね」

好乃「演劇って、どんなことするん？ おば
あちゃん、あんまりそういうのよう分から
んけえ」

雅也「保育園とかで発表会ってあるでしょ。
役をもらって、セリフを覚えて、何かを演
じるやつ」

好乃「ああ、お芝居みたいなものかね」

雅也「そうそう。それをやってるの。自分で
物語を書くほうもやってるけどね」

好乃「確か、あんたはそういう学校行ったん
じゃろ」

雅也「うん。よくよく考えれば、うちのおじ
いちゃんも、岐阜のおじいちゃんも職人じ
ゃん。だから、その二つの遺伝を受け継い
だのかなって思ってる」

好乃「書く仕事も、ある意味では自分の腕で
やることじゃもんな」

雅也「でしょ。そりゃ、上手く書けないとき

もあるし、いろいろ大変なこともあったけど、何とかここまでやってる。でも、これからコロナでどこまで影響が出るか……」

好乃「テレビのニュースじゃ、亡くなった人もおるって言うし、特に東京とかじゃどんな広がつとるじやろ。こっちに影響がな
きや良いんだけど」

雅也「これでおじいちゃんやおばあちゃんが
コロナに感染してもしものことがあったら、
一生コロナ恨むからね」

と、隣に設置してある洗濯機の通知音が鳴る。

好乃「洗濯物干してくるわ。あ、皿は水につ
けとけばええ。後はおばあちゃん、やっ
とくから」

雅也「うん」

好乃、洗濯籠に洗濯物を詰めると、出
ていく。

雅也、食事を終わると、皿を流し台に
置き、再び卵の殻を細かく崩し始める。

11 同・表

洗濯物を干している好乃。

12 同・B和室

新聞を読んでいる雅也。

N 「コロナの影響はどうなるのか、まだ分からない状態でした。ですが、仕事道具を持つて行かず、仕事や締め切りに追われず、ネット環境のない祖父母の家で暮らすという、この何ともない日常がいつまでも続いてほしいとも思っていました。明日の夕方には、もう新幹線で愛知に戻っていると思うと、寂しい気持ちでもありました」

つづく